

林業試験地から 森林技術・支援センター

新年明けましておめでとうございます。今回は、当センターの試験地で樹齢100年を超える18の人工林の中から特徴ある高齢級のヒノキ林分を紹介いたします。

試験地は、茨城県のシンボルである筑波山（日本百名山・標高877m）にあり、山頂からは富士山や関東平野を360度見渡せる景勝地にある試験地です。この筑波山石岡市側の中腹東向きに明治33～34年に植栽した樹齢約120年生のヒノキ一斉林（写真1）が生育しており、昭和52年に技術開発の「筑波山複層林試験地」として設定しました。



写真1 筑波山複層林試験地（1979年撮影）

この試験地（写真2）は、景観維持を目的とする風致施業モデルとして8タイプの高齢級多段林を設定し、人工更新を体系化する試験地です。

この試験地約34ha内は、一般の方々が入場から試験地内を気軽にトレッキングするコースがあることから、この歩行順路と上空からの撮影により説明します。

最初は、「木材の搬出」を考慮して、魚の骨の形状（写真3①）に一定の幅で伐採するモデル林です。

次は、ヒノキの下層木が、上層木の伐採本数（写真3②）で、どのような生長を遂げていくのか、陽光の条件の違いで比較できるタイプの試験地をご



写真2 筑波山と複層林試験地（2018年12月無人航空機撮影）

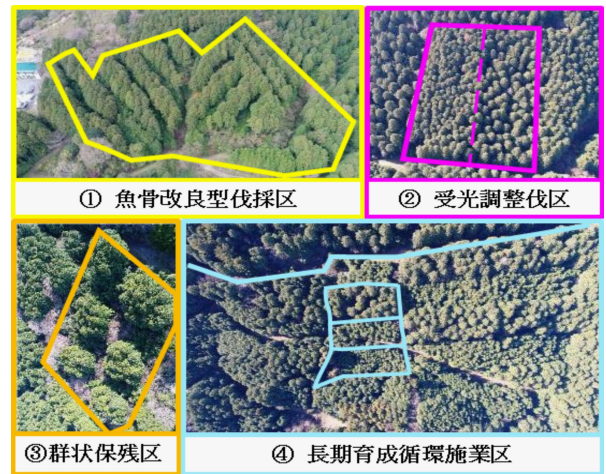


写真3 筑波山複層林試験地施業タイプ

覧いただくことができます。

更に下っていきますと、上層木のヒノキを、それぞれに点状や円形の群状（写真3③）また、斜面に対し横の列状に伐採したモデル林があり、この空間に植栽したヒノキの生育がどのようになっているかタイプ毎の見比べが可能となっています。

次のモデル林は、20年毎に計画的に伐採している「長期育成循環施業区」（写真3④）です。具体的には、景観維持に配慮しつつ、更新を人工的に適正に繰り返すこととし、森林を小面積でモザイク状に皆伐し、8段林（現在は3段林）に誘導する長期試験課題としています。

また、下山コース終点には、ヒノキ

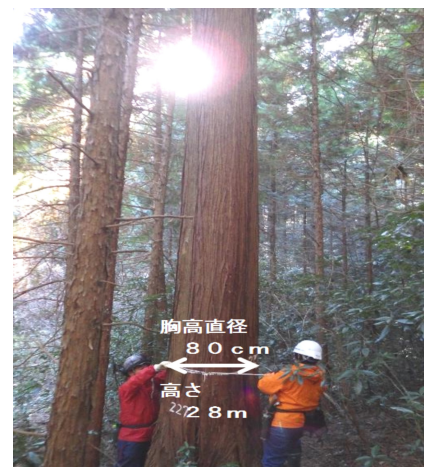


写真4 点状保存区内のサワラ

に混じり植栽した経過は不明ですが、サワラの大径木（写真4）が訪れる人々を歓迎します。近年は、ドローンによる撮影で、上空から生育状況などを比較できるようにりましたが、やはり現地をみて森林の経営管理の参考にしたいだければ幸いです。昨年は、北海道の林業家グループや埼玉県林務担当グループの団体のほか2機関が当試験地を訪問して意見交換をしました。

国際的に地球温暖化対策や生物多様性が求められるなか、樹齢100年を超える文化遺産を護りつつ林業の普及活動等の知見を広めることも当センターの重要な業務です。個人・団体視察会等で大径木に直接触れることができそうですので希望される方は、当センターにお問い合わせ願えば幸いです。

今回は、200年を超えるスギ人工林を紹介するのでご期待ください。